

家庭科

自己を見つめ、よりよい生活を創る子



家庭科

自己を見つめ、よりよい生活を創る子

西岡 里奈

日々の生活を学びの対象としている家庭科では、子供たちが創っていくものは「生活」である。変化が大きい現代で、よりよい生活をめざすためには、自己を見つめ多様な価値から取捨選択して生活を創っていく力を身に付けていくことが重要である。自分の生活を当たり前と思うのではなく、自分自身の生活を振り返り他者と関わり、さまざまな視点からとらえていくことで、「自分は、こうしたい!」という思いをもって、生活の主体としてよりよい生活の実現に向けて実践できる子供を育成していく。

1. 家庭科の研究テーマ

(1) 家庭科の課題と子供たちの生活実態

生活をよりよくすることをねらっている家庭科では、子供たちの日々の生活の変化が学習に大きく関わってくる。子供たちを取り巻く環境は日々変化し、家庭の仕事も簡素化や外部化によって内容や質が変わりつつある。変化が激しい現代だからこそ、家庭科で実生活を見つめ、よりよくするための力を身につけていくことが大切である。

本校の子供たちの様子を見てみると、意欲的に学習に取り組む子供が多い。しかし、その一方で、学習に際し自分の生活を意識しているかや、学んだことを生活へと還元できているかという点に至らない部分もある。たとえば、食事の大切さを学習し、「好き嫌いしないで、栄養のバランスよく食事をしたい」と回答していても、実際の食事では嫌いなものを避けたり、偏った食事をとっていたりすることがある。理論としては理解しているかもしれないが、生活をよくしようというところまではたどり着いていない。また、子供たちの生活が多忙化したことで、家庭の仕事に関わる機会や自分で取捨選択をすることが少なくなり、与えられたものを疑問なく受け入れて現状で満足している傾向がある。家庭生活の課題をあげさせても「特にない」と答える子供も多い。そのため、子供たちにとって当たり前と思っている現状をまずは見つめなおすことが重要になってくる。このように変化が激しく、家庭生活へのつながりが希薄化している中で、子供がいかに自分の現状を正確に把握し、問題意識をもって取り組んでいくかが課題である。

(2) 家庭科で求められているものとは

家事の外部化や IoT 家電など子供たちを取り巻く家庭生活が大きく変化し、一から家庭で何かを作るという機会も減少しつつある。世の中が便利になる中で、学校教育の家庭科としてどのようなことが求められているかを見てみると、日本家庭科教育学会(2019)では家庭科教育における重視すべき視点として「生活の科学的認識」「生活に関わる技能・技術の習得」「他者との協力・協働・共生」「未来を見通した設計」の4つをあげている。従来からの生活事象を科学的にとらえ実践していくための知識や技能に加えて、他者との関わりや先を見据えた生活の実現について重要視されている。この点については、平成29年度告示の小学校学習指導要領解説でも改訂の改善事項として、「空間軸」と「時間軸」という二つの視点から家庭科の学習をとらえていくことが示された。空間軸の視点では、家庭、地域、社会という空間的な広がりから、時間軸の視点では、これまでの生活、現在の生活、これからの生活、生涯を見通した生活という時間的な広がりから学習対象を捉えて指導内容を整理することが適当であるとしている。

人との関わりという点においては、「共感性」も注目されている。美馬(2021)は、AI やロボットと共生する社会で人にとって重要なものとして「共感性」をあげており、「生活するとは何なのか」と普段はあまり意識していない、生きることを考えるきっかけを与えてくれる教科としての「家庭科」の意義を説いている。ミルトン・メイヤーロフ(1987)は、ケアを「その人が成長すること、自己実現することをたすけること」と定義しており、ネル・ノディングズ(2007)は、いわゆる教科として知識・技能などといった有能さ(competence)におけてだけでなく、すべての子どもたちをケアすることにおいても教育すべきであるとしている。小学校家庭科でも、異なる世代の人々との関わりなど家族・家庭生活に関する内容の充実が行われ、人との関わりから家庭生活を見つめなおすことの重要性が示されており、本研究

でも、人との関わりの中で子供たちが自分の生活を見つめ直し考えていけるようにしたい。

(3)テーマ設定の理由

①「自己を見つめる」とは

家庭科における学びの対象は家庭生活であり、私たち誰もが営んでいるものである。しかし、それらがあまりにも当たり前の日常であるがゆえに、ほとんどの行為が無意識のうちに行われている。また、子供たちは親や大人の養護のもとに暮らしているため、自分が安心して暮らせる環境におかれていることや、毎日当たり前のように食事が食べられたり、整った衣服を着られるのはなぜかといった家庭生活の本質に気付きにくく、日々の生活について改めて立ち止まり、暮らしの成り立ちや暮らしを成り立たせるための活動や家族の存在を意識したり、なぜそうするのか理由を考えたりする機会は少ない。また、学校での学習と家庭生活を切り離してとらえている子供もいて、家庭科での学習が家庭実践へとつながっているとは言い難い場面もある。そのため、子供自身が今まで当たり前だと思っていたこと、できると思っていた生活事象と改めて向き合い、実際にやってみたり考えてみたりする機会をつくることで、生活に対する見方・考え方を変化させていくことへとつながっていくと考える。そして、改めて家庭生活を意識し向き合うことで、自己を見つめて自分はどのようにしたいかを明確にし、家庭生活にすすんで関わっていこうとする態度を育成させたい。

②「よりよい生活を創る」とは

子供によって家庭環境は様々で、自分が当事者であるがゆえに多面的に家庭生活を見ることが難しい。そのため、子供たちの多様な考えや生活様式が現れるような題材を設定し、自分と友達の生活の中に類似性を見付けたり、自分とは違う考えや生活様式を知ったりすることで自分の家庭生活を客観的にふり返られるようにする。そして、家庭生活とは正解があるものではなく、様々な様式や方法・価値があることに気付き、それを認めて、多様な価値を比較・検討する中でよりよい生活を創るための方法を選択・判断し、決定できる力を身に付けさせていきたい。

2. 全体研究テーマとの関連

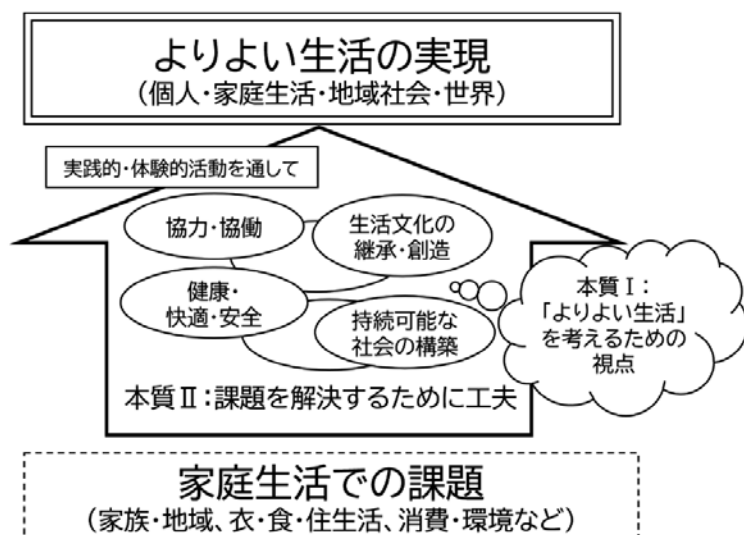
(1)家庭科の本質の吟味

①本質Ⅰ(個別知識・技能を統合・包括する鍵概念)

「学びを創る」の定義が「一人一人の子供が、各教科等の本質的な学びを味わい、自らの学びを価値づけること」だとしたら、家庭科における「学びを創る」とは、どのようなことなのか。小学校学習指導要領には、家庭科の学習において「生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫すること」とある。家庭科で子供が創るものは生活であり、よりよい生活を営むためには「どのような生活をおくりたいか」といったその子なりの思いやこだわりが重要である。

そのため、家庭科の本質Ⅰとは、子供たちが「よりよい生活」を考えるための視点だと考える。平成29年の小学校学習指導要領では、生活の営みに係る見方として「協力・協働」「健康・快適・安全」「生活文化の継承・創造」「持続可能な社会の構築」の4つが示されている。子供が「こんな生活をおくりたい」と考えたものが、自分自身にとってはよい生活だとしても、他者を思いやっていないものや環境への負荷が多いものなど自分本位で共生と反する内容では、社会生活を構成する一員として難しい。どのような視点で生活を考えていくかが大切である。

そのため、本研究は、学習指導要領に示されている4つの視点を家庭科の本質Ⅰとしてとらえて授業を考え、授業実践を通して更なる視点があるかを吟味し、探索的に研究を行っていく。



②本質Ⅱ(その教科等ならではの認識・表現の方法)

子供自身が家庭科の学習を自分事としてとらえ、よりよい生活に向けて工夫していくためには、「生活を見つめる→課題を見いだす→課題を解決する→生活に生かす」といった問題解決的な学習を通して、自分自身の生活を見つめて課題を解決していく能力を育てていくことが重要だと考える。例えば、調理実習を行う際には、作り方を教師が一方的に教えるのではなく、材料の切り方や火加減、ゆでたりいためたりする時間など、子供たちが話し合ったり実際に体験をしたりすることで課題を解決する方法を考えて見つけていけるようにしていく。調理実習では「〇〇を作った」と子供たちは調理したメニューに注目しがちだが、何を作ったではなく、どんな技能や知識を活用して課題解決に取り組んだのかといった学習の過程を意識するようになっていく。このように、問題解決的な学習を充実させ、自分自身で体験し活動を行うことで子供たちが個々の家庭での課題や生活事象と向き合い、よりよい生活を目指すための力を育てていく。

(2) 一人一人が本質を味わう学びのプロセス(省察的課題への支援)

家庭科の本質を味わうためには、知識・技能を生活体験等と関連付けてより深く理解するとともに、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫することが大切である。そのために、一人一人が本質を味わう学びのプロセスとして、以下の3点を意識した授業を展開していく。

① 本質的かつ個別的な問題設定

家庭科では、子供たちが生活を見直して学びを創っていくために、衣食住に関する実践的・体験的な活動を通して実生活を意識して学習していくことがとても大切である。そのために、実生活を意識した題材の工夫が必要である。今までの研究の成果として、子供たちの実体験にもとづくものを題材として設定をしたところ、自分の生活をふり返って発言したり、実践に向けて改善していこうとしたりする様子が見られた。このように、子供自身が実体験をイメージしやすく、なぜこの題材を学ぶのかをよく理解したうえで学習していくことが大切である。事前に生活に生かしている場面を設定し、学習後に照らし合わせることで自分自身の成長を実感できるような題材の工夫を行っていく。そのためには、子供たち自身が、家族の一員として成長する自分を肯定的にとらえ、家庭生活の大切さに気付くと共に、「家族にしてみよう自分」から「家族のためにする自分」へと向かっていくことが重要である。ただ、技能や知識を学ぶのではなく、現在の自分が「できること」と「できないこと」を明らかにし、「これからできるようになりたいこと」「なりたい自分の姿」を意識することで、生活を意識して家庭科を学ぶことの必然性が見えてくると考える。そして、子供たちの「このようになりたい」という願いから授業を展開していきたい。例えば、「おみそ汁をつくれるようになりたい」という子供の願いからみそ汁という題材を使って作り方だけでなく、朝食の必要性や栄養、材料を購入するための買い物の仕方や包装やごみなどの環境についてといったように、それぞれを結び付け、生活のしくみや生活事象を関連付けて、一連の流れとしてストーリー性をもって学ばせていく。

また、子供が学びを作るために、空間軸と時間軸を意識した学習を展開していく。時間軸(図1)では、今・この自分を考えるだけでなく、過去の自分を振り返って成長を実感するとともに、将来に向けての自分を考えていくことも重要である。家庭科の学習を通して、自分になりたい姿や生活をイメージして学習に取り組むことで、より具体性をもった課題解決へととなると共に、学校生活だけでなく、日々のよりよい生活へとつながっていくと考える。

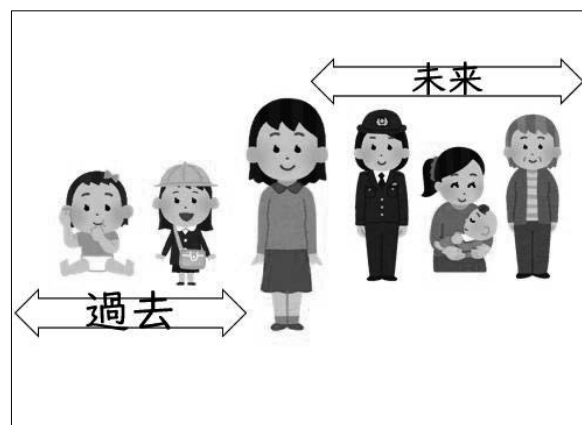
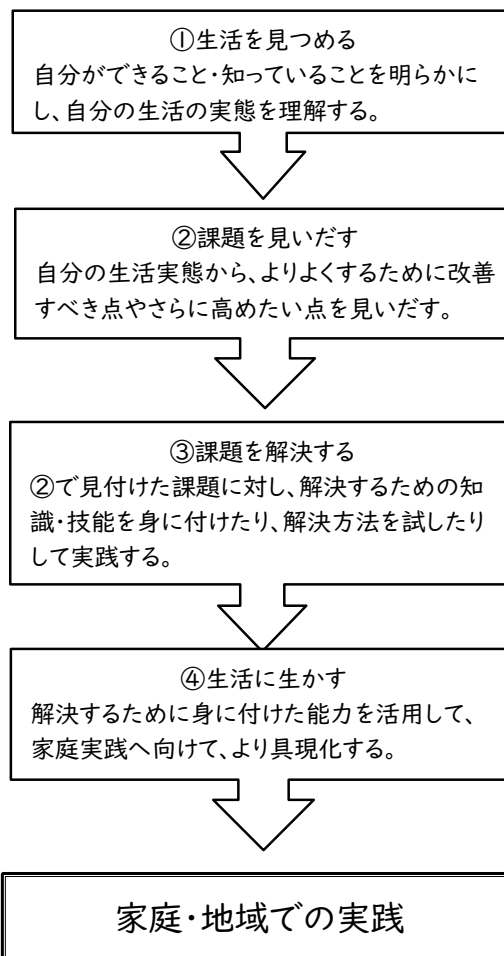


図1 時間軸のイメージ

空間軸（図2）では、学習している内容を授業の時間の中だけで活用して行くのではなく、各教科での学習や学校生活・家庭生活、家庭生活から地域社会や世界と広げていくことが大切である。実践していく中で、自分の身の回りだけでなく、家族の立場になって考えたり、自分の行動が社会にどのような影響を与えているかなどを吟味したりと、子供たちが視点を広げていけるようにしたい。

②解決過程への批判的な振り返り

子供が自分の学びを創っていくためには、様々な様式や方法・価値があることに気付き、多様な価値を比較・検討する中で客観的に自分を見られるようになることが重要である。そのため、子供たちの思考の幅を広げていく必要がある。例えば、多様な価値があらわれる題材を設定したり共通の経験をしたりとすることで、同じ経験でも友達との感じ方の違いがあることに気付いたりといったことがある。

一緒に学ぶ友達の存在も大きな役割を果たす。自分の価値だけにとらわれるのではなく、友達の考えが新たな気付きにつながることもある。共感性をはたかせ、自分だけでなく他者の立場になって考えることも重要である。（図3）そのような学習活動を通して、子供自身がそれぞれの生活例や考えを出し合い話し合い、様々な視点から自分の生活をふり返っていくことで学びを創っていけるようにしたい。

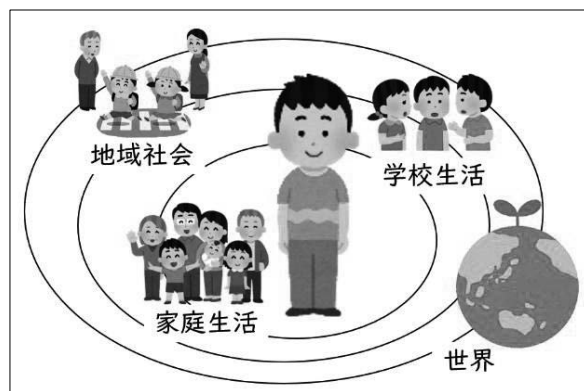


図2 空間軸のイメージ

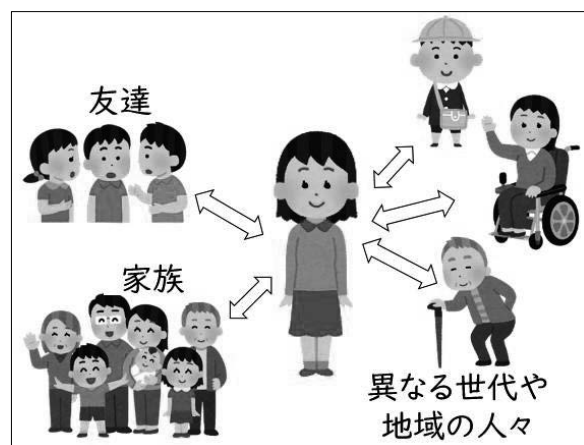


図3 多様な価値との出会い

3. 成果と課題

(1)研究の成果

今年度の家庭科の授業では、「おいしいみそ汁を作る」ことを目標に実践を行った。同じ目標であっても、「おいしさ」の感じ方は一人ひとり異なり、味や具材の選び方に個性が表れる題材であった。そのため、子供たちは自分なりの工夫やこだわりをもって取り組むことができた。学びを主体的に創り出すためには、課題を自分事として捉え、意識をもって取り組むことが重要である。今回の実践では、子供たちが「どうすればもっとおいしくなるか」を考え、だしの取り方や具材の組み合わせを試行錯誤する姿が見られた。さらに、友達と味を比べたり感想を伝え合ったりすることで、互いの工夫を認め合い、学びを深める場面もあった。こうした過程を通して、子供たちは自分の調理工程を見なおしてよりよいものを追求していくことができ、授業実践を通して主体的に学びを創る力を育むことができたと考えられる。

(2)今後の課題

今後の課題は、子供たちの学びの過程をどのように見取っていくかという点である。成果物だけではなく、試行錯誤や工夫のプロセスを丁寧に評価する視点が求められる。また、個別の問題設定をどうもたせるかも重要である。共通のテーマを扱いながらも、一人ひとりが自分なりの問いをもって取り組めるよう、題材や指導の工夫が必要である。

【引用・参考文献】

- ・日本家庭科教育学会 編.(2019).『未来の生活をつくる 家庭科で育む生活リテラシー』.明治図書.
- ・文部科学省.(2018).『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 家庭編』.東洋館出版社.
- ・美馬のゆり.(2021).『AIの時代を生きる 未来をデザインする創造力と共感力』.岩波ジュニア新書.
- ・ミルトン・メイヤロフ 田村真・向野宣之訳.(1987).『ケアの本質 生きることの意味』.ゆみる出版.
- ・ネル・ノディングズ 佐藤学訳.(2007).『学校におけるケアの挑戦 もう一つの教育を求めて』.ゆみる出版.

「おいしい」を探究する

ー第5学年「おいしいみそしるを作ろう」を通してー

西岡 里奈

1. 実践のポイント

子供たちにとって、みそ汁は日常的に口にするため身近な料理である。しかし、身近であるがゆえに「知っているつもり」になり、実際の調理過程や出汁の役割、具材の切り方などについて深く理解していない場合も少なくない。そこで、本題材では、みそ汁の作り方を理解するとともに、出汁の取り方や和食がもつ伝統文化としての価値に目を向けて自分なりのみそ汁を作れるようになることを目指していく。

本学級の子供たちは、1学期にゆでる調理の学習で青菜のおひたしやゆで野菜サラダを作り、食材の切り方やゆで方を学んできた。また、5月の宿泊行事では、火おこしから挑戦する野外調理で豚汁作りを経験している。そのため、「みそ汁はもう作れる」と感じている児童も多い。しかし、豚汁作りでは出汁をとったり野菜の煮え方を工夫したりという様子はあまり見られなかった。そこで、本題材では、教科書の手順をそのままなぞるのではなく、より主体的に「自分たちで考えて作る」学習へと発展させたい。

指導にあたっては、出汁の種類や取り方の違いによる味の変化や、実の切り方・組み合わせによる食感や風味の違いに気付けるようにし、子供たち自身が調理計画を立てて実践できるようにする。みそ汁は日常食であるが、家庭によって実の切り方や味に違いが見られる料理である。本題材を通して、子供たちがみそ汁作りの技能を身に付けるだけでなく、「自分好みのみそ汁」を追求する楽しさを味わい、和食文化への理解を深めて家庭実践へとつながるようにしていきたい。

2. 研究テーマとの関連

(1)本題材で味わう家庭科の本質

①本質Ⅰ(個別知識・技能を統合・包括する鍵概念)

本題材では、「おいしいみそ汁を作る」という目標に向かって、単に作り方を理解するだけでなく、自分なりの工夫やこだわりをもって調理に取り組むことを大切にしたい。例えば、「よりおいしく仕上げるためには何が必要か」「だしのうま味を生かすにはどうすればよいか」「具材の切り方や組み合わせはどのようにするとよいか」など、「おいしい」を具体的に考えて実践できるようになってほしい。

②本質Ⅱ(その教科等ならではの認識・表現の方法)

授業の導入では、まず試し調理を行い、手順や工程の違いによって味や仕上がりが変化することを実感させていく。その体験をもとに、「おいしいみそ汁とは何か」といった要素を自分たちで見いだし、その気付きや考えを踏まえて自分なりの調理計画を立て、実際の調理へとつなげていけるようにする。

(2)一人一人の子供が本質を味わう学びのプロセス(省察的課題への支援)

子供が学びの本質を味わうためには、創意工夫を引き出す授業環境を整えることが重要である。本題材では、調理の手順や材料の量など、自分なりの工夫を試せる余白を確保し、主体的に判断しながら学習を進められるようにする。また、他の班が作ったみそ汁や出汁を飲み比べることで、味の違いを体験的に捉え、「どの工程が影響しているのか」と考える機会をつくる。さらに、調理計画を自分で吟味し、見通しをもって調理に臨めるよう、子供たちが書きやすい計画の形式を提示したり、タブレット PC を活用して記録・比較・振り返りを行ったりする支

みそ汁の作り方を考えよう

組 A組・B組

調理手順	具材の準備 片づけ
① 水を釜に入れる。(A)は水 (B)は水	釜・水
② にぼしのはらわたと頭をきる。(B)は道具を多めに (A)	・きり板 ・包丁
③ 野菜を洗う。(洗いは済ませる)	
④ 野菜を切る。(A)ははしで切る。(B)ははしで切る	
⑤ 大根を入れる。(A)ははしで切る。(B)ははしで切る	
⑥ だしを入れる。みそをいれたら、火を落とす。(洗)	
⑦ 大根が煮えたら、油あげを先に、おろしを後に入れる。(洗)	
⑧ 完成!	

煮の材料

大根 …… いちょう切り ◻ ◻ ◻ ◻ ◻
油あげ …… 矢張り切り ◻ ◻ ◻ ◻ ◻
おろし …… 小口切り ◻ ◻ ◻ ◻ ◻ ◻ ◻ ◻ ◻ ◻

図1 手書きで作成した調理計画

援も重視する。こうした一連のプロセスを通して、子供たちが自ら考え、確かめ、改善していく学びへとしていきたい。

3. 実践の実際

まずは、自分たちがどれくらいみそ汁の作り方を理解しているかを把握するため、第1次には生活経験をもとに調理計画を立てて試し調理を行った。「かんたんだよ。」と言っていた子供たちも、実際に手順を書き出してみると「あれ？みそと実はどちらを先に入れるんだろう？」「みそを水に溶かしてから温めるの？」と、理解していない部分があることを実感していた。その計画をもとに、みそ・煮干し・水の3つの材料だけで行った試し調理では、みその量が少なくても煮干しの調理の仕方によっては濃い味になったり、3つの材料だけでも味に違いあったりすることに驚いた様子だった。

試し調理で、「どうしたら煮干しから味（うま味）を引き出すことができるのか。」と、疑問にもった子供たちが多かったため、第2次には、出汁の取り方に着目して学習を行った。煮干しの有無や煮る時間で味がどのように変わるのかを体験し、おいしいみそ汁には出汁をしっかり取ることが大事だと気付くことができた。また、かつお節と昆布の出汁も飲み比べて、出汁の種類によっても味が変わることを体験した。

第3次では、試し調理や出汁の飲み比べを生かして調理計画をたててみそ汁作りを行った。調理はペアで行い、調理計画は紙のワークシート（図1）やタブレットPC（図2）を活用して行った。教科書では、主な流れしか示されていないが、ペアで役割分担をしたり、空き時間を活用する方法を考えたりしていた。みそ汁の実も既習のゆでる学習を生かして早くやわらかくするために、薄く切ったり、鍋に入れる順番を工夫したりする様子が見られた。

学習のまとめは、PowerPoint を使用して自分たちが行った写真や調理計画を見ながら、おいしいみそ汁の作り方を具体的に振り返ることができた。

4. まとめ

本題材では、友達が作ったみそ汁や出汁を飲み比べる体験を通して、調理工程の違いによる味の変化に気づくことができた。子供たちは「作り方によって味が変わる」という発見をしたことで、「もっとおいしいみそ汁を作りたい」という意欲につながった。この経験は、自分なりの調理計画を立てる力を育むきっかけにもなったと考える。

今回は、試し調理と計画後の調理の2回の実習を行ったが、みそ汁の実も教師が用意した種類のみであり、工夫の範囲が限定的だった。そのため、子供たちが「自分らしいおいしさ」を追求するには、選択の幅が十分ではなかったと考える。今後は、実や出汁の種類を子供たち自身が選べるようにするなど、より主体的に工夫できる環境を整えて、子供たちが味の違いをさらに深く理解し、自分なりに工夫を重ねて実践できるようにしていきたい。

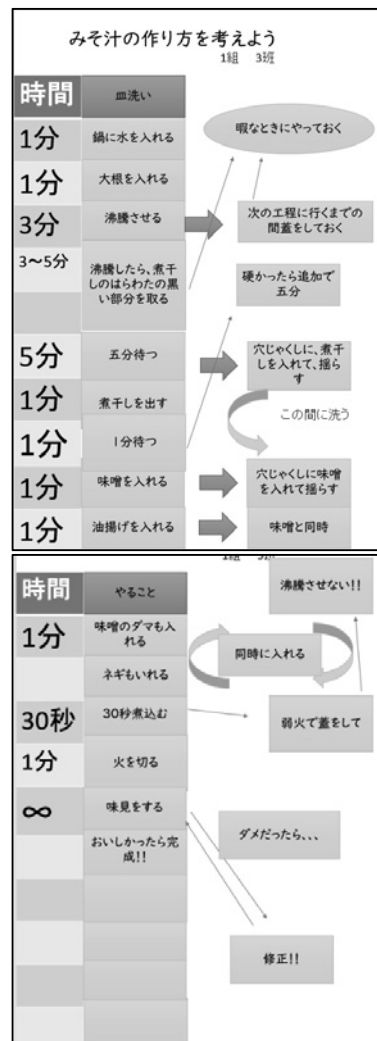


図2 タブレットPCで作成した調理計画

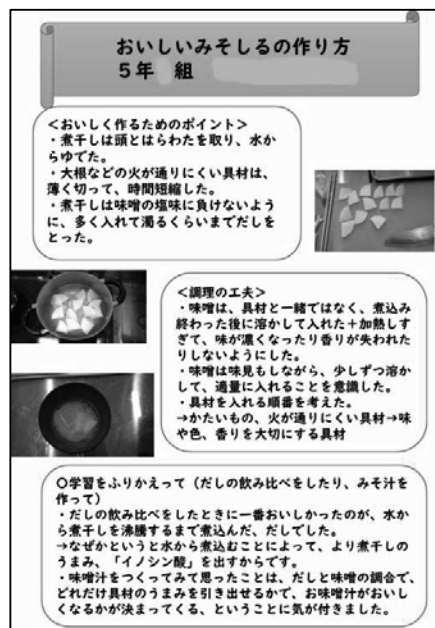


図3 題材のまとめのワークシート